



子どもの聞き役こそが、大人の役目

校長 橋本 滋

夏休みが終わり、いよいよ2学期が始まりました。子どもたちが元気に2学期を迎えてくれたことに安堵の気持ちとともに、保護者の皆様のご協力に感謝申し上げます。子どもたちは、夏休みを思い思いに楽しただけでなく、家族で、あるいは友達同士で、さらに地域で様々な体験をし、それらを自らの財産としてくれたものと思います。

さて、いよいよ今日から2学期のスタートです。実りの秋と言われるように、2学期は自分の力をより高め、確実なものとする学期です。「さあ やるぞ!」という気持ちで、学習に運動に励んで欲しいと思います。

さて、私も夏休み中にいろいろな本を読みましたが、その中で印象に残ったものに、「子どもの社会力」という本がありました。(岩波新書 門脇 厚司 著) 興味深いところが多々ありましたのでご紹介したいと思います。【以下一部抜粋】

心が作られる最初の段階は、赤ちゃんは母親が見ているものと同じモノを見ながら、お母さんがどんなことを考えているのかを読みとることから始まるそうです。例えば、子猫を見ながら母親が「かわいいね」と口にしたら、同じ子猫を見ているヒトの子は、かわいいという感情が母親の心の中で引き起こされていることを理解し、自分の中に生じている感情が「カ・ワ・イ・イ」という音の連続であることを習得していくのだそうです。その繰り返しのよって言葉と心が結びついていくわけです。

心が育つためには、その子の周りにはいる大人たちがその子が働きかけたことに、きっちり応答すること。笑いかけたら笑いかける。「何コレ」と聞いたら少し高い声でそのものの名前を言う。当たり前のことを手抜きせずやるのが心を育てることになります。この子どもの応答を無視すると発達に重大な影響が出てしまうとのこと。

そのことを裏付けることに、孤児院の例があります。ある孤児院は、衛生的で医療的な環境も整っているモデル的な施設であるにも関わらずことばがしゃべれない子が多い、死亡率が高いなど、子どもの発達に問題が生じていました。他方、設備も悪く、医療的な配慮もない貧弱な施設の子どもたちだったのに、普通の家で育った子どもたちと同じように健全な育ち方をしていました。その差は、モデル施設の方は、子ども10人に看護婦1人だったのに対し、貧弱な施設は、子ども2人に1人の割で面倒をみていたのです。子どもの発達を左右するのは、施設や設備の立派さではなく、人との接触の度合い、他者との相互行為が多かったか少なかったかであったがどうか。だと言えます。むずかかっていても「また」と言って放っておいたり、「アー」「ウー」と声を出していても何もせずにそのままにしたりすることは非常なマイナスです。以前テレビで若い夫婦がゲームをしたいがために乳児をほったらかしにしてしまい、重大事態になってしまった報道を見たのを思い出し、あの時の暗い気持ちが蘇りました。

さて、ここでご紹介したのは、乳幼児期の子どもの心の発達についてでしたが、児童・生徒期の子どもに対してもこのことは重要であると思います。子どもが大人に対して働きかけた時には、大人はそれに応えてあげること。それを怠れば子どもの心にやがて不具合が生じてきます。SNSが発達すればするほど、顔を見ての直接の応答が重要となると思います。子どもは子どもなりの悩みがあるものです。子どもにとってよき聞き役、理解者として今後ともよろしく願います。



